

小論文

<総括>

試験時間	70 分	総解答字数	700 字
------	------	-------	-------

課題文は、妻をがんで亡くした筆者が、病を得た妻と向き合い、その死を看取った経験を通じて、病む者との関係性を考察したものであり、看護医療学部とは親和性の高い内容の文章だと言えるだろう。病者と向き合うこと、そして、そこでの病者とケアの提供者の心理や関係性について読解説明し、見解を述べるという、医療看護的な色彩の強い出題である。

設問は、例年通り2問構成で、下線部についての読解説明の問題1と、下線部についての読解説明と見解論述を求める問題2の出題から成る。問題1は100字以内と制限字数が少な目だが、そのぶん問題2が読解説明の要素が強く、例年通り読解力重視の設問構成になっている。

<課題文の分析>

大問番号	
内 容 (主題)	苦しむ者と支える者の関係性
出 典 (作者)	若松英輔『魂にふれるー大震災と、生きている死者ー』、トランスビュー、2012年、212～217頁
長短・ 難易等 前年比較	長短 (短い・やや短い・ <u>変化なし</u> ・やや長い・長い) 難易 (易化・やや易化・ <u>変化なし</u> ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
	課題文	学部系統的	問題1	説明	100字	下線部1) について、筆者がなぜそのように指摘しているのか、課題文の内容を参考に説明する。
			問題2	説明+論述	600字	下線部2) はどのようなことか、課題文の内容を参考に説明し、それに対する自分の考えを加えて論述する。

※出題形式は「テーマ・課題文 (英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

例年通り、ひとまとまりの文章を正確に読解し、その内容を的確に理解する力がまず要求される出題になっている。昨年度同様、読解した内容の説明にかなり重点を置いた設問構成であるが、「生態系」に関する文章が出題された昨年度と比較すると、医療看護系の受験生にとっては、なじみやすい内容で、読みやすかったのではないかと思われる。

問題1は、下線部1)「病む者に元気がなると声をかけることが、いかに残酷であるか」について、なぜそのように指摘しているのかを、課題文を参考に説明することが求められている。下線部1)のある段落とそれに続く3つの段落を参照して、病む者の心理についての考察を中心に、設問に応じる形でまとめればよい。

問題2は、下線部2)「苦しむ者は、多く与える者である。支える者は、恩恵を受ける者である」とはどのようなことかを、課題文を参考に説明し、それに対する自分の考えを述べることが要求されている。説明は、下線部2)以降の箇所を、筆者と病の妻との関係性をふまえて述べていくことになる。「苦しむ者」であるはずの妻が筆者にとってどのような存在であり、妻と向き合う中で筆者はどのようなことを感じ、考えたのかを参考にして、丁寧に、ある程度の字数を割いて行う必要がある。

自分の考えを論じるにあたっては、例えば、医療の場における医療従事者と患者との関係性のあり方、自分がこれまで病者や被災者のような「苦しむ者」と接した体験などを材料に考えてみることができるだろう。

看護医療学部の小論文問題は、今年度はきわめて医療看護色の強いものであったが、医療や科学技術といった学部系統的なものから一般教養、社会的な問題など、年度によってさまざまな出題内容が見られる。医療系に限定せず過去の多様な出題に取り組んでおくことが重要であることには変わらない。多様な出題テーマに対応できるように、日頃から見聞を広めておくことが重要であることを認識しておこう。

医療従事者を目指す受験生は、医学・医療や科学・科学技術に対する一定の見識を持つのはもちろんのこととして、広く社会や人間にも目を向けることが求められる。